

令和 8 年 5 月 27 日

報道機関 各位

データサイエンスで拓く島根の未来！島根大学が仕掛ける産学連携 PBL「データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習」中間発表会を 6 月 3 日(水)に開催

◆本件のポイント！

- ・【全国的にも異例】「ちゃんと、交わる」をテーマに学生×地域企業がワンチームで挑む！
- ・【社会的意義】データサイエンスで、島根のリアルな経営課題・地域課題に切り込む。
- ・【映像・写真映え】様々なステークホルダーが一堂に会する。

◆本件の概要

本発表会は、島根大学数理・データサイエンス教育研究センターが提供する「データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習」の中間発表会、および企業交流会です。

本プログラムの最大の特徴は、学生と地域企業・団体が「ワンチーム」となって課題に挑んでいる点にあります。

授業の Web ページ(<https://sites.google.com/pbl-shimane.com/mds2026>)

公式 instagram(https://www.instagram.com/shimadai_mds/?hl=ja)

◆本件に関する写真





人とともに 地域とともに

島根大学

SHIMANE UNIVERSITY

◆概要内容

日時:2026年6月3日(水)

【中間発表会】16:50-18:30

【企業交流会】19:00-21:00

場所:島根大学教養講義室棟 2号館 504室(2F)

【企業交流会】島根大学学生会館 2F 集会室

対象:地域活性化、DX、データサイエンスの活用に関心のある方、学生との協働や新たな産官学連携ネットワークに関心のある方、地方創生や次世代教育モデルに関心のある方。

◆本件の連絡先 ※[at]は@に置き換えてください

島根大学 数理・データサイエンス教育研究センター(事務担当:里田史子)

0852-32-6129

mds[at]riko.shimane-u.ac.jp

【添付資料: あり(2枚) なし】

※カラー版のプレスリリース原稿を、下記ページよりご覧いただけます。

<https://www.shimane-u.ac.jp/introduction/publicrelations/news/news50.html>





「問い」から始まる、 人と地域にやさしい未来

まずは、この資料を手にとっていただいたことに、心から感謝申し上げます。

本資料は、島根大学と地域の企業・自治体の手を取り、実際の現場が抱える課題に真正面から向き合う「PBL（Project-Based Learning, 課題解決）型授業」のご案内です。

私たちが実践するPBL型授業には、予め用意された「正解」はありません。大切なのは、現場の人々の声やそこに眠るデータに耳を傾け、複雑な状況の中から「真の課題は何か」を自らで問いを立てることです。

このプロセスを通じて私たちが育てたいのは、単に「技術が使える」だけの人材ではありません。データが持つ力を正しく理解し、その解釈が人や社会にどのような影響を与えるのかを立ち止まって考えられる「知徳」を備えた人財です。

そのような人財が持つ「問いを深める力」「仲間と協働する力」、そして「データに基づいて考える力」は、単に目先の数字を追うだけの、現場に無理を強いる「効率化」を目指すためのものではありません。私たちが大切にしているのは、短期的な成果のために何かを削り取るのではなく、長期的な視点で現場の技術や想いを守り、次の一步を支えるための「持続可能な改善」です。

それこそが、人や現場に配慮した「やさしい選択」を重ねていくための基盤になると信じています。

本授業が学生にとっての学びの場であると同時に、大学と地域が知恵を共有し、共に成長し続けられる「知の拠点」となることを目指してまいります。



データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習部門長
島根大学 数理・データサイエンス教育研究センター
センター長/教授

黒岩 大史



【お問い合わせ】

データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習 事務局
島根大学 数理・データサイエンス教育研究センター

- E-mail — mds@riko.shimane-u.ac.jp
- Tel — 0852-32-6129
- 住所 — 〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

授業の様子や現場のリアルな熱量は、公式Instagramで発信中！以下のQRコードからご覧いただけます。



令和8年度実施
地域と共に育てる「人にやさしいDX」

データサイエンスによる
ソーシャルイノベーション実践演習

学生と、 ちゃんと、 交わる。



国立大学法人島根大学
数理・データサイエンス教育研究センター

データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習とは

知徳

DS Literacy & Ethics

「技術」に「責任」を宿す
データや技術を正しく使いこなす力（知）とその行使が人や社会へ与える影響について考え続ける姿勢（徳）の修得を目指します。

協働

Co-Creation & Resonance

「現場」と「知」が共鳴する
学生の感性と、現場の深いドメイン知識（現場知）を掛け合わせ、真に機能する解決策を導き出すプロセスになります。

課題解決

Social Innovation & Sustainability

プロジェクトの実装が学び
「知」のオープンソース化や「知徳」を備えた人材の輩出を通じて、本演習が地域における無形の公共財、すなわち「知のインフラ」として根付くことを目指します。

PBLで共に作り出す3つの価値

Three Values We Co-Create

大学と地域（企業・自治体）が深く関わり、「人にやさしいDX」を実装する産官学連携プロジェクト

現場主導の改善と次世代人材の育成

学生を「DX推進チーム」として迎え、現場データの可視化や業務の自動化を共に進めます。学生との協働は、職員・社員の皆さまが自らの業務を客観的に見つめ直し、DXマインドを育む貴重な機会となります。

地元企業

企業から学生へ
(現場知・キャリア体験)

地場企業から大学へ
(成功事例（ロールモデル）で社会価値を高める)

学生から企業へ
(DX推進・自動化)

大学から企業へ
(学生との接点を創出)

大学から学生へ
(企業との協働・データに触れる機会の提供)

学生から大学へ
(PBL実績によるブランド向上)

学生

大学

社会に資する「データサイエンスの知徳」の習得

教室での学びを超え、現場の課題解決に責任を持って取り組む「実装型」の学習を体験します。その中で、技術を「どう使うか」を自ら引き受ける姿勢（知徳）を養います。

持続可能な

「知の循環」モデルの構築

地域全体でDX人材を輩出し続ける運営基盤を整え、人口減少社会を支えるロールモデルを島根から発信します。

データサイエンスによるソーシャルイノベーション実践演習

カリキュラム

Curriculum

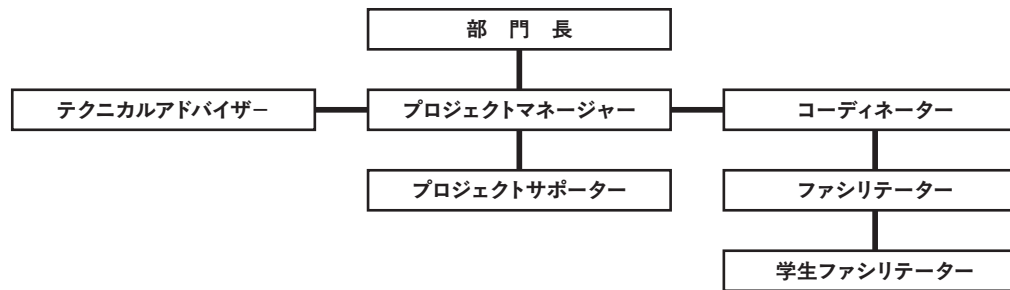
授業から始める“現場DX”

学生 × 社員の協働で課題を解決していきます



PBL型授業、初めてでも安心

様々な専門家が進行サポートします



【外部専門家：技術、伴走支援】

- コーディネーター：大学、企業、運営メンバーの橋渡し。
- テクニカルアドバイザー：技術的、実務的観点から意思決定をサポート。
- ファシリテーター：学生企業チームの思考を引き出す伴走支援。

【大学：企画運営、教育】

- 部門長：PBLの教育方針を定め、運営全体のマネジメント。
- プロジェクトマネージャー：授業のマネジメント。
- プロジェクトサポーター：授業、運営に関わる実務的な支援。

プレ実施参加学生の声

(令和7年度参加)

プロの熱量にあてられ、自分の現在地を知る



プロジェクト参加学生（2年生）

現場の方の想いを直接伺う中で、大学生活では考えもしなかった「社会人の視点」の一端に触れることができました。目の前の課題を何とか動かそうとする責任感や、現場を支えるスピード感。その熱量を肌で感じ、自分の甘さや視野の狭さを思い知らされました。就職を前にこの温度差を体感し、きれいごとではない「現場のリアル」に直面できたことは、何よりの財産になりました。

土に触れ、データの重みに圧倒される



プロジェクト参加学生（2年生）

未知の農業分野。田植えや稲刈りを通じ、土の感触や現場の熱量を身体で知ったとき、課題解決への道筋が見えた気がしました。ところが、目の前に差し出されたのは、散らかった数字の羅列であり、教科書のデータとは似ても似つかないものでした。私はただ立ち尽くすのみで、現場体験で得たはずの自信に根拠がなかったことに気付かされました。現場の厳しさと共に、社会におけるデータ利活用の本当の難しさを教わりました。

知識ゼロでも、一歩踏み出す勇気を



プロジェクト参加学生（1年生）

知識がまったくない1年生での挑戦でした。島根の企業の課題と向き合う日々は不安の連続でしたが、先生やファシリテーターのきめ細かな支えが、私を前へと進ませてくれました。壁にぶつかっても、対話を重ねて伴走してくれる体制があったからこそ、最後まで逃げずにやり遂げることができました。現場を知り、悩み抜いた時間が、『やり遂げられる』という自信を与えてくれました。

暗闇の中で、輝く星を探して



プロジェクト参加学生（2年生）

データサイエンスが将来必要なスキルだと頭では理解しているつもりでした。それでも、どこか他人事で…。そんな冷めた認識を変えたのは、現場の泥臭い現実でした。暗闇の中で自分の立ち位置を確認するための「星」となるべきデータが、洗練されず、活用しきれない。その危うさを目の当たりにしたとき、この力を身に付けなければ、いつまでも目的地へ辿り着くことはできない、という漠然とした不安だけが私を腹落ちさせてくれました。もちろん、すぐに猛勉強を始めたわけではありません。しかし、少なくとも「何かを理解したつもりでいる自分」は辞めようと思えるようになりました。